Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

特集紹介（特集 東アジアにおける宗教と家族・地域）

藤井, 勝

(Citation)
社会学雑誌,29:1-6

(Issue Date)
2012-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011121

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011121

KOBE UNIVERSITY

特集紹介

藤井勝
神戸大学大学院人文学研究科教授

一

本特集は、東北アジアと東南アジアから構成される領域全体を東アジアと把握した上で、この東アジアの社会（とくに家族・地域レベル）において宗教とはいかなる存在なのか、また東アジアの人と社会は宗教といかに関わってきたのかを、実態をふまえつつ解明することを目的としている。ここで「実態をふまえつつ」とは実証的と言い換えてもよいが、要は単に文献に依拠するだけではなく、フィールドワーク等によって獲得した知見にもとづくということである。本特集に所収の六論文はいずれも執筆者の着実なフィールドワークに基づいており、研究対象となる地域社会、とくに集落等の事例分析に立脚した議論がなされている。こうしたアプローチによって深い洞察が生み出され、説得力のある分析が展開している。

ハンチントンは、文明を形づくる要素として宗教をもっとも重視しつつ、今日の東アジアには六つもの文明、つまり中華＝儒教・道教、日本、仏教、イスラム教、西欧＝カトリック・プロテスタント、東方正教会があるとしている（Huntington 1996=1998:54・331）。実際、東アジアにおける宗教的な多様性は他に類をみない。仏教、イスラム教、キリスト教という世界宗教がそれぞれ億単位で宗教人口を抱えている。仏教人口は日本、タイ、ラオス、カンボジア、ミャンマー、ベトナムなどでは大多数、中国、韓国、台湾でも一定割合を占める。イスラム教人口はインドネシア、ブルネイ、マレーシアでは大多数、フィリピン、タイ、中国などでも一定割合を占める。キリスト教人口はフィリピンでは大多数、韓国でも相当な割合、それ以外の国・地域でも一定割合を占める。さらに東アジア発祥の大宗教（あるいはそれに準ずる規範文化）として道教や儒教が中国、

韓国、台湾などで信仰・信奉されるとともに、現在では宗教人口はわずかであるものの、インド発祥のヒンドゥー教も一部に存在する。

本特集の諸論文は、このような東アジアの宗教文化の多様性を十分に反映したものとなっている。林論文は台湾を対象として道教文化圏を、岡田論文は韓国を対象として儒教文化圏を、森本論文は日本を対象として仏教（大乗）文化圏を、首藤論文は中国の回族を対象としてイスラム教文化圏を、長坂論文はフィリピンを対象としてキリスト教文化圏を、橋本（関）論文はタイのモーン族を対象として仏教（上座部）文化圏を、それぞれ取り上げているからである。東南アジア島嶼部のイスラム教文化圏・ヒンドゥー教文化圏をのぞく、東アジアの主要な宗教文化圏を視野にいれることができた。

二

以上のような今日の宗教分布は、紀元前からの宗教の生成・発展・伝播・受容の結果である。その出発は仏教に求めることができる。紀元前五世紀に今日のインド東北部で生まれた仏教はその周辺に広がったが、有力な流れが東北アジアへ、つまり一世紀ごろに中国（後漢）へ、そこから朝鮮そして日本へと進み、大乗仏教として成長した。一方、東南アジアではインド文化全体の影響、つまり四世紀頃よりヒンドゥー化、つまりインド化が次第に進んだ。インド人自身によって小王権が形成されたり、権威づけのために土着小王権が宗教を利用したりしたことを出発として民衆にも拡大したとされる（Coedès 1948=1989: 45,52）。その宗教とはヒンドゥー教だけでなく仏教も含むものであったから、今日でも東南アジアの各地には仏教遺跡とヒンドゥー教遺跡が混在したかたちで残存している。興味深いのは、その仏教には大乗仏教の流れも強く存在し、紀元五世紀頃には東南アジア島嶼部にまで伝わり、八世紀頃にはジャワ島内の王権に庇護され、ボロブドゥール寺院が建設されるなどした。

東北アジアの仏教化と東南アジアのインド化はその後盛衰の道を歩む。東北アジアでは、漢民族固有の宗教・イデオロギーである儒教・道教の影響力が増大した。儒教は中国では漢代以来歴代王朝によって統治イデオロギーとして採用されてきたし、朝鮮そしてベトナムにも一四・五世紀から同じようなかたちで導入された。このような拡大・定着をふまえて、日本をも含めて儒教文化圏は形成されているとの見解がある（加地　一九九〇：四八）。一方、道教は中国の民間信仰を統合しながら、民衆レベルに広く普及した。道教は仏教の影響を受けることにより宗教としての体系化が進んだとされるが、一方では仏教さえも内部

に取り込んだ側面もみられる。また道教は、日本の民間信仰に大きな影響を与えているとされている（坂出祥伸二〇〇五）。その結果、儒教や道教がとくに発展した中国や朝鮮では、政治的影響も加わって、仏教の地位は逆に大いに低下したといって過言ではなかろう。なお中国ではイスラム教は今日に至るまで固有のイシューとして存在するが、首藤論文はこうした問題の理解にとっても有益であろう。

一方、東南アジアでは、スリランカを経由した上座部仏教の影響が一層強まることによって、大陸部では単なるインド化ではなく、明確な上座部仏教化が進展した（ただしベトナムは中国経由の大乗仏教）。橋本（関）論文が対象とするモーン族はそのなかでもっとも古くより南伝仏教の影響を受け、上座部仏教を信仰してきたとされる。一方、島嶼部ではアラビア商人との交易のなかでもたらされたイスラム教が各地の支配者達に受容されることによって、ヒンドゥー教・仏教は次第に弱まり、いわゆるイスラム化が一六世紀頃より次第に進展した（Reid 1993=2002:176）。島嶼部においてインド化の影響を今日まで強く維持できたのは外形的にはバリ島であり、そこでは今日でもヒンドゥー教と仏教が信仰されている。

キリスト教については、西洋諸国における「大航海時代」以来、東アジアへの布教が継続的に行われてきたが、大規模な普及は、インド化やイスラム化の影響が顕著でなかったフィリピンにおいてのみであった。もっとも第二次世界大戦後には、儒教国である韓国で次第に受容され、今日では儒教とならぶまでの宗教勢力になっている。さらに改革開放後の中国でも、キリスト教の宗教人口が相当に増大していると推定されている。

三

東アジアの宗教という観点からみた場合、これらの世界宗教や大宗教は単独で存在する、つまり単独で人々の信仰対象になっているのではなく、土着の固有宗教・信仰と結びついてきたことが重要である。東アジア内の各地には古くより、神霊信仰の形態をとる土着信仰が存在しており、それらはさまざまな神霊（精霊、死霊、祖霊、悪霊など）の存在を前提にして成り立ち、アニミズムやトーテミズムの性格をもっている。キリスト教やイスラム教のような一神教世界では、ヨーロッパの魔女狩りに象徴されるように、土着信仰が排除される傾向が強かったが、東アジアでは事情は異なった。東アジアでもっとも普及してきた仏教はインド的な多神教的世界観を土壌にして成立し、唯一神をもたないために無神論的とも理解されるが、同時に、だれでも（上座部仏教では僧になる必要がある）宗教実践（修行

など）を通じて仏、言い換えれば神（あるいはそれに近い存在）になれるという認識を根底に有している（早島ほか　二〇〇七）。むしろの土着の神霊信仰と宗教的土壌を共有する面があるといえる。

つまり東アジアで展開したのは世界宗教・大宗教と土着信仰の相克ではなく、むしろシンクレティズム（混交・習合など）である。日本における仏教と神霊信仰（最終的には神道として統合され、教義化される）の関係も、その一例である。しかもイスラム教やキリスト教といった一神教を受容した社会でさえも、土着信仰は維持され続けている。たとえばインドネシアでは古くは仏教やヒンドゥー教が滲透し、土着信仰とのシンクレティズムが生じたが、その後のイスラム化にあっても、民間のさまざまな信仰は廃れることはなく、ジャワ島のクバティナンに代表されるように基底には根強く息づいているとされる（福島　二〇〇二）。一神教の神は、土着の多様な神々と共存できる存在として受容されているのである。

本特集の諸論文は、このような宗教の側面を非常に的確かつ、豊かに論じている。林論文は、道教と土着信仰（神霊信仰とシャーマニズム）が不可分に結びついて地域社会の宗教の基礎が構築されることを、煮油儀式による除穢実践のなかに描き出している。森本論文は、寺檀制度のもとでの死者祭祀のなかに日本の祖霊信仰と仏教の結びつきを、長坂論文は、死者祭祀のなかにキリスト教と精霊信仰との混交をとらえている。また橋本（関）論文は、敬虔な仏教徒であるモーン族が他方では精霊・祖霊信仰のよき実践者であることを明らかにしている。一方、首藤論文は、回族の一部では教義や宗教慣行においてイスラム教と儒教の折衷が図られていることを考察し、世界宗教・大宗教間のシンクレティズムをとらえている。

四

冷戦体制崩壊後の世界では、宗教を主な規準とする文明ごとの統合や結束が促進され、結果として「文明の衝突」が生ずるとされている（Huntington　1996=1998）。もちろん現代に限らず、歴史的にも宗教が人々の大きな結束力となって、異なった宗教間の対立、あるいは国家による特定宗教の弾圧を生み出してきたことは、首藤論文によっても明らかである。しかし対内的にみれば、宗教は個々の人間の救済はもちろんのこと、人々が形成する基本的な共同社会（ゲマインシャフト）である家族（また親族）や地域の安全や統合のために存在しているものである。つまり宗教とは、第一義的には、日常を生きる民衆が家族や地域といった共同生活の安心や安寧を求めて、さらに家族や地域の集団・関係としての統合や永続を求めて行う社会的文化

的実践にほかならない。そのためにさまざまな儀礼や慣行がそれぞれの社会や地方で発達し、独自の宗教生活がそれぞれのところで確立してきた。東アジアでは、以上のような諸宗教・信仰の融合と習合のなかで宗教的実践がなされることにより、その内容は一層複雑で幽玄なものになったといえる。

本特集の諸論文は、このような家族・地域のなかでの宗教の姿を深く考察している。森本論文や長坂論文はおもには家族・親族レベルに焦点を当てている。前者は、日本の家制度や親族システムのあり方と結びついて仏壇や墓所における祭祀形態の差異が生み出されることを、長坂論文は、フィリピンの死者祭祀儀礼が圏的家族構造のもつ柔軟性と対応しながら実践されることを、それぞれ明らかにしている。そして他の論文は、家族と地域の両面へと考察を広げている。林論文は、台湾の除穢儀式という宗教的実践が家族や村落の安全や平安のためになされる仕組みを、漢族的文化とも連関させながら、極めて詳細かつ豊かに描き出している。岡田論文は、韓国における儒教的「孝」儀礼の実践が伝統的な親子関係を安定・維持してきたこと、また末端地域レベルの儒道会の活動が伝統的地域文化の保持に貢献してきたことを論じている。橋本（関）論文は、モーン族には家系や村落のシンボルとなる精霊が存在し、その信仰・儀礼によって家系や地域のアイデンティティが確立され、共同生活が守られることを明らかにしている。さらに首藤論文も、回族におけるイスラムと儒教との融合や相克を、政治レベルだけではなく、家族・一族そして集落レベルの慣習・実践としても論じている。

五

このような宗教と家族・地域の結びつきのありかたは固定的ではなく、社会変動のなかで変化・変容してきたことは言うまでもない。たとえば首藤論文は、歴史的な視点から回族の宗教運動や宗教実践を地方別に考察することにより、家族・地域レベルでのイスラム的実践が、権力との関係の影響をうけながら一定の地方的多様性をもちながら変化することを提示している。とくに宗教が国家や権力と緊張関係に置かれている場合には、民衆側の戦略次第で家族・地域レベルでの宗教実践の姿も異なってくる。現代における変化に関しては、岡田論文が、一九九〇年代の韓国の都市化のなかで地方における家族・地域の変容が進み、それに対応して儒教的実践の形態や内容が次第に変容することを詳細に考察しているところである。つまり東アジアの現代的社会変動を要因として、家族・地域のなかにおける伝統的宗教実践が弱まるという傾向は確かに存在することになる。

同時に、仏教文化圏を対象とする森本論文や橋本（関）論文は異なった側面もとらえている。前者は、現代日本では人々の信仰心は弱まったと一般的に言われるものの、家族・地域レベルでみると今日でも数多くの宗教的な装置や実践が存在すると論じている。後者によれば、バンコクの周辺部や郊外といった都市化の影響の強い地域でも、仏教と精霊信仰の混交する宗教的なシンボルや実践が豊富である。さらに森本論文は、このことをふまえて、東アジアにおける宗教と社会の結びつきは、一神教的世界の場合とは異なるという論点を示唆している。敷衍すれば、教義体系への帰依が信仰心と直結する一神教的世界とは異なり、東アジアでは多神教的で相対主義的な宗教文化が根強いために、信仰心はさまざまな宗教儀礼の行為・実践そのものなかに息づいていると理解してよかろう。たとえ一神教が導入された社会でも、このような傾向はみられるのではなかろうか。

いずれにしても、本特集の諸論文を通じて、東アジアにおける宗教・信仰と民衆の共同生活の豊かな結びつきを再認識できるとともに、その二一世紀の姿をさまざまに論ずることも可能になる。

本特集を企画する出発点になったのは、比較家族史学会第四九回大会（二〇〇七年六月に神戸大学人文学研究科で開催）で行われた小シンポジウム「東アジアにおける家族と宗教実践」である。この時の成果を出発にして、新たに執筆者も加え、またテーマも見直しながら、今回の特集に至った。多忙のなかを寄稿いただいた執筆者、とくに本企画のために特別にご寄稿いただいた林瑋嬪先生にこの場を借りて感謝したい。またこの寄稿をつうじて、台湾の地域社会や文化についての理解が日本で深まることを祈念するものである。

参考文献

加地伸行　一九九〇『儒教とは何か』岩波新書

坂出祥伸　二〇〇五『道教とはなにか』中央公論新社

早島理・木村宣彰・太田清史　二〇〇七『仏教思想の奔流―インドから中国・東南アジアへ―』自照社出版

福島正人　二〇〇二『ジャワの宗教と社会―スハルト体制下インドネシアの民族誌的メモワール―』ひつじ書房

Coedès, George. 1948. *Les états hindouisés d'Indochine et d'Indonésie*, E. de Boccard.（＝ジョルジュ・セデス　一九八九『東南アジア文化史』〔山本智教訳〕大蔵出版）

Huntington, Samuel P. 1996. *The Crash of Civilization and the Remaking of World Order*, Simon & Schuster.（＝サミエル・ハンチントン　一九九八『文明の衝突』〔鈴木主税訳〕集英社）

Reid, Anthony. 1993. *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume Two: Expansion and Crisis*, Yale University Press.（＝アンソニー・リード　二〇〇二『大航海時代の東南アジアⅡ―拡張と危機』〔平野秀秋・田中優子訳〕法政大学出版局）